上越教育大学教職大学院研究紀要　第６巻　平成31年２月
Bull. Teaching Profession Graduate School Joetsu Univ. Educ., Vol. 6, Feb. 2019

クラス会議導入期における課題に対する手立ての検討
－「ペアDEトーク」に着目して－

吉　内　元　子*・赤　坂　真　二**

（平成30年８月31日受付；平成30年11月29日受理）

要　　旨

本研究では，学級活動における話し合い活動の一つであるクラス会議の課題を克服するための手立てとして「ペアDEトーク」に着目し，その効果を明らかにすることを目的とした。固定化された人間関係や話し合いに対する消極的な姿勢が課題として指摘された小学６年生に対して，クラス会議の導入期において「ペアDEトーク」を朝の会や授業で，毎日継続的に実施した。その結果，児童のコミュニケーションに対する意欲や行動に影響を及ぼし，児童の学級満足度の向上が見られた。これにより「ペアDEトーク」が，クラス会議の課題を克服するための手立てとして有効であることが確認された。

KEY WORDS
クラス会議　ペアDEトーク　朝の会　Q-U

1　問題の所在と目的

中央教育審議会答申(2016)では，「学校教育を通じて子供たちに育てたい姿」として「他者の考えを理解し，自分の考えを広げ深めたり，集団としての考えを発展させたり，他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること」と述べている[(1)]。また，小学校学習指導要領解説特別活動編(2017)では，目指す資質・能力の視点の一つとして「人間関係形成」を挙げており，「集団の中で，人間関係を自主的，実践的によりよいものへと形成するという視点である」と説明し，その必要性を訴えている[(2)]。さらに，小学校学習指導要領解説特別活動編(前掲)では「集団や自己の生活，人間関係の課題を見出し，解決する為に話し合い，合意形成を図ったり，意思決定したりすることができるようにする。」と述べている[(3)]ことから，学校教育では，協働力や人間関係形成力を育むために，集団で問題解決や話し合いを行っていくことがこれまで以上に重視されているといえる。

では，どのような話し合い活動が効果的なのだろうか。先行研究を概観する。明石(1978)は，小学校高学年の学級会において「“発言力の重み”感覚が，子どもの学級会への参加意欲を左右している」ことを明らかにし[(4)]，「“発言力の重み”感覚を支えている要因は～中略～人前での自己表現力に関する評価が大きなウエイトを占めている。」と述べている[(5)]。また，松岡(2013)は，ドイツのヘッセン州における「Klassenrat(学級会)」の取組に着目し，日本での民主的な「学級会活動」の必要性を指摘している[(6)]。松岡(前掲)は，民主的な「学級会活動」を行うにあたり，「児童一人一人が自然な雰囲気のもとで互いに周りの意見を傾聴し受け入れたり，その一方で自分の考えを自分の言葉で表現したりする」やり取りの場の重要性を述べている[(7)]。畑山(2008)は，話し合い活動を行うにあたり「よさを認める場」や「温かい雰囲気の学びの場」の重要性を指摘しており，話し合い活動を効果的に進めていくためには，その土台となる環境づくりが重要であると指摘している[(8)]。井木(2015)は，20分のミニ学活「マイタイム」を設定し，児童同士の話し合い活動を実践した[(9)]。井木(前掲)は，このような話し合い活動を日常的な取組として定着させていくことで，話し合ったことの計画，実行，改善のサイクルが児童に根付き，本気で実践する姿が見られたと述べている[(10)]。以上の先行研究から，話し合い活動は，児童自身が主体的になって取り組むべきものであり，そのためには安心して話し合える学級の雰囲気や一人一人が認め合える場の設定など，話し合える環境を整える必要があることが分かる。また，話し合い活動を日常的に取り組んでいくことで，話し合いで決まったことの計画，実行，振り返りの一連のサイクルの定着や，本気で実践しようとする意欲につながると考えられる。

この話し合い活動の条件を満たすと考えられる活動に，赤坂(2014)が提案する「クラス会議プログラム」がある[(11)]。北野(2015)は，対人関係の向上を目指した取組として「クラス会議プログラム」を導入し，児童同士の人間関係づくりに効果的であることを明らかにした[(12)]。北野(前掲)は，クラス会議は「子ども同士の場の設定と教師の明確

*各務原市立各務小学校　　**学校教育学系

な意識の２要素が合致している」と述べており，「子ども同士の場の設定」が「かかわり合う場では交流と共行動，認め合う場では共感と承認，支え合う場では共感と支援において望ましい子どもの姿」の育成につながったと述べている[13]。赤坂(2014)は，クラス会議を「子どもたちが生活上の問題を議題として話し合い，クラス全員で解決を探す時間」であるとし，「相手を論破するのではなく，分かり合い，協力し，双方が納得する答えを見つけ出す民主的な話し合いである」と述べている[14]。また，古庄(2014)は，クラス会議の実践について「全員が平等に参加し，ものごとの決定に等しく責任を負うことで，相互尊敬と協同にもとづく民主的なクラス共同体が形成され，学習集団として質の向上も期待できるように思われる」と述べている[15]。つまり，「クラス会議プログラム」は，学級全体で主体的に取り組むことができると考えられる。さらに赤坂(2014)は，「継続は力なりと言いますが，クラス会議は特に継続していくことで成果が見えてくるものです。最低でも１週間に１度以上，２ヶ月くらい続けて，ようやく担任に効果が見えてきます。つまみ食い程度に実践したくらいでは効果は見られません」と述べており[16]，クラス会議は継続して実施していくことで効果をもたらすことが分かる。以上の先行研究から，クラス会議は先ほど述べた，児童一人一人が話し合える雰囲気や話し合いにおける民主性，日常的に取り組む継続性等，話し合い活動が機能するための条件を満たしていることが示唆される。

しかし，赤坂(2010)は，クラス会議の導入期において効果的に進めるためには「学級の土壌づくりが重要である」と指摘している[17]。続けて「安心して意思疎通するためには、コミュニケーションのルールを決めるなどして質を上げる必要性があります。(中略)ルールが機能するには、ある程度のコミュニケーション量が必要なのです。」と述べている[18]。つまり，クラス会議を効果的に進めるためには，クラス内のコミュニケーション量が少ない場合には，クラス会議の土台となるコミュニケーション量を確保することが必要である。では，コミュニケーション量を確保するためには，どうすれば良いのだろうか。

クラス内のコミュニケーション量を増やすための実践は複数実践されている。曽山・武内(2012)は，小学校において，週１回15分程度の朝の会を活用した「SSTショートプログラム」を実施した[19]。また，高橋・犬塚(2001)は，朝の会，帰りの会で「SGEプログラム」を実施した[20]。しかし，週１回という限られた時間での実施であり，コミュニケーション量を確保するには不十分であると考えられる点や，活動を実施する際の準備が担任の負担になってしまう点，対象学級の担任の要望により活動が適さないこと等が課題として挙げられる。

鈴木(2016)は，朝の会での活動に「ペアDEトーク」を紹介している[21]。「ペアDEトーク」は，テーマに合わせてペアで語り合う活動である。鈴木(前掲)は，「子供が協力し合うことで一体感のある安心の雰囲気を生み出します。」と述べており[22]，子ども同士のつながりが希薄な学級においては，効果的であると考えられる。また，朝の会の中で行うことができるため毎日実施できる点や，慣れてきたら日直の児童が進めていけるため担任の準備の負担が少ない点，「会話が中心となる活動が欲しい」という対象学級の担任の要望に合致する点など，先述の課題を克服できると考えられる。しかし，「ペアDEトーク」が「クラス会議」の導入期において，学級内のコミュニケーション量の確保に有効であることを示した研究は，管見の限り見当たらない。そこで，本研究では「クラス会議」の導入期における子ども同士のコミュニケーションの量を確保するための手立てとしての「ペアDEトーク」の有効性を明らかにすることを目的とする。

2　研究方法

2．1　調査の対象

Ａ県Ｂ市公立小学校第６学年Ｃ学級(男子14名・女子13名　計27名学級)

2．2　対象の選定理由

対象学級を選定した理由は次の通りである。まずクラス会議が未経験であり，話し合い活動の経験値が少ないこと，また，担任へのインタビューで「発表に苦手意識をもっている子が多い」「男女の会話が少ないこと」(**3．1「アンケートと担任へのインタビューより」参照**) が指摘され，クラス全体のコミュニケーション量の少なさが推察されたことである。

2．3　期間

実態調査：2017年９月１日～10月23日，本調査：2017年10月24日～2017年11月30日

2. 4　実施の方法

2. 4. 1　「クラス会議プログラム」について

「クラス会議プログラム」は，話し合いの土壌づくりと問題解決のための話し合いの二つの部分からなる。対象学級では，週１回のクラス会議を実施した。クラス会議を実施するにあたり，まず，話し合いの基本的な価値・スキルや態度を身に付けることを４時間行った[23]。赤坂(前掲)は，「クラス会議の運営は，教師が教えるべきことを指導しながらも，徐々に子どもに委任していく方向で展開した方がより効果的である。」と述べている[24]。そこで，始めの４時間が終わり次第，除々に子どもたちが自分たちでクラス会議を進められるようにした。第４時までの内容は以下の通りである。

第１時　順番に話すこと・肯定的な感情を出すこと	第２時　傾聴・相手を傷付けない言い方のスキル
第３時　多様な見方・考え方をすること	第４時　責めない・罰しない解決の方法

クラス会議１時間の流れは以下の通りである。

①円になる　②あいさつ　③話し合いのルール　④ハッピーサンキューナイス　⑤前回の解決策の振り返り
⑥議題の提案　⑦話し合い(解決策を出す・解決策をしぼる)　⑧決まったことの発表　⑨先生の話　⑩あいさつ

まず，机は使用せず，椅子のみで円になる。③の「話し合いのルール」は第２時で決めた児童が安心して話し合うためのルールを毎回読み上げる。④の「ハッピーサンキューナイス」とは自分が感じた喜びや感謝の気持ち，友達への尊敬の気持ちなどを一人ずつみんなに発表する活動である。赤坂(前掲)は，最初に児童同士が認め合う場を設定することで，ポジティブな雰囲気をつくることができると述べている[25]。また，教師の介入は次の場面で行った。

・事前の司会団の打ち合わせ　・クラス会議における適切な介入と肯定的なフィードバック
・クラス会議後の司会団の振り返り

2. 4. 2　「ペアDEトーク」について

鈴木(前掲)の「ペアDEトーク」を基に，毎日，朝の会や授業の最初の時間で実施した[26]。提示されたテーマについて２分間話し続け，会話が途切れたら着席するというルールで行った。日直が進行を行い，テーマはくじで決めた。ペアは，毎日一人ずつ交代していくことで，毎回違う相手と会話ができるようにした。テーマの内容は，担任の先生と話し合いながら「カレーとラーメンどっちが好き？」や「犬派？猫派？」といった選択式のものにした。また，話し合いの経験値の少なさを考慮し，話し合いを進めやすいように，ちょんせいこ(2015)の会話を続かせるための質問「オープンクエスチョン」を参考資料として教室に掲示し，子どもたちが活用できるようにした[27]。以下は，「オープンクエスチョン」の内容である。

＜話を盛り上げる質問＞(オープンクエスチョン)
・というと？　・どんな感じ？　・それでそれで　・どうして？　・例えば？　・具体的には？
・もっと詳しく教えて？　・他には？

2. 5　分析の方法

2. 5. 1　楽しい学校生活を送るための学校アンケート（以下Q-U）

赤坂(2010)は，クラス会議の導入期において，「民主的な話し合いをするための土壌づくり」が重要であり，児童同士が安心して意思疎通ができる関係や雰囲気が必要であると述べている[28]。また，河村(2012)は「理想の学級集団」について，「学級内に親和的で支持的な人間関係が確立している」と述べている[29]。つまり，クラス会議の導入期において，児童同士が安心して話し合える学級の状態が重要であることが分かる。河村(2006)は，学級集団の状態を調べるために「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」（以下，Q-U）を作成した[30]。Q-Uは，「学級満足度尺度」と「学校生活意欲尺度」の２つの尺度から構成されており，本研究では，学級集団全体として人間関係を見とることができる「学級満足度尺度」の「承認得点」と「被侵害得点」から，学級の変容を読み取る。なお，中野(2014)の「js-STAR」を用いて分散分析を行った[31]。

2. 5. 2　エピソード分析

データの裏付けを行うために，エピソードの分析を行う。クラス会議は児童の発言・行動の記録，担任との打ち合わせにおけるインタビュー記録，実施前後の学級についてのアンケート記述から，「ペアDEトーク」は，実施前後の自分の変容についてのアンケート記述，児童の発話・行動の記録から，質的な変容を見取る。

3　実態調査

3．1　アンケートと担任へのインタビューより

表１　Q-U（N＝27）

承認	平均値	標準偏差
７月	20.48	2.22

被侵害	平均値	標準偏差
７月	9.46	3.69

表１は，クラス会議を導入する前の７月に測定したQ-Uの平均と標準偏差である。承認得点は18.5点，被侵害得点は11.5点を境界に，承認得点が高く，被侵害得点が低い「学級生活満足群」，承認得点が低く，かつ被侵害得点も低い「被承認群」，承認得点が高く，かつ被侵害得点も高い「侵害行為認知群」，承認得点が低く，かつ被侵害得点も低い「学級生活不満足群」の４つに分類される。

被侵害行為認知群 ４人	学級生活満足群 21人
学級生活不満足群 ２人 （要支援群０人）	被承認群 ０人

図１　Q-Uプロット

また，図１より満足群の子どもが80％であったことから，対象学級は「親和的なまとまりのある学級集団」であると言える。担任へのインタビューでも，「落ち着いていて，きまりを守り，教師に言われたことはやろうとする態度が身に付いている」とのことからも，Q-Uの結果と一致していると考えられる。しかし，その一方で，担任は以下のような課題も指摘している。

・男女で壁があり，男女で相談したり話し合ったりすることに抵抗を感じている。
・自分たちで考えて行動することが苦手。
・リーダーシップを発揮できる児童とできない児童の差が大きい。（発揮できない児童ができるようになって欲しい。）
・その場で考えて意見を発表することが苦手な児童が多い。

3．2　クラス会議の様子の観察より

クラス会議を始めた頃，以下のような児童の様子が見られた。

【９月27日　フィールドノーツより】
解決策に対して賛成や心配を出す場面で，男子９人女子１人が意見を言っていた。その他の児童は，意見を言えずにトーキングスティックを回していく様子が見られた。
【10月４日　フィールドノーツより】
男女交互で座っている中，司会が「近くの人と相談してください」と声をかけると，一つとばして同性同士で相談していた。

以上の様子からも，担任の聞き取りにもあった男女の壁や意見発表が得意な児童と苦手な児童の差が大きいことが考えられる。また，10月４日のクラス会議後，担任との打ち合わせの中で，以下のような課題が指摘された。

・根底に男子と女子の問題がある。議題提案用紙に男女のことを書いた子が半数いる。
・男子と女子の関係性について，嫌いじゃないけど無関心。心の中では仲良くなりたいと思っているが，腹を割って話せない状態にある。

以上のように担任も児童も男女の壁について課題に感じていることから，クラス会議導入期において，児童間にコミュニケーション上の課題が確認されたため，10月24日からの本調査において「ペアDEトーク」を併用し，効果の分析を試みた。

4　本調査

4．1　Q-Uの結果・分析

表２　Q-U　分散分析（N=27）

承認	平均値	S.D.	F比
７月	20.48	2.22	0.42n.s.
11月	20.74	1.94	

被侵害	平均値	S.D.	F比
７月	9.46	3.69	6.63*
11月	7.96	2.03	

+p＜.10　*p＜.0.5　**p＜.0.1

表２は，実態調査で得た７月，「ペアDEトーク」とクラス会議の併用実施後の11月の結果である。承認得点は有意な差は見られなかったが，被侵害得点は有意に下降した。このことから，「ペアDEトーク」とクラス会議を併用して行ったことで，被侵害得点の下降に影響があったと示唆される。

また，有意な差が見られなかった承認得点をさらに詳しく分析していくために，Q-Uの基準値に満たさない児童を「下位層」とし，承認得点の変容を追った。

表３　Q-U　分散分析　下位層（N＝６）

承認	平均値	S.D.	F比
７月	17.17	1.21	7.48*
11月	19.33	1.11	

+p＜.10　*p＜.0.5　**p＜.0.1

表３から，承認得点の下位層児童において，有意な差が見られたことから，クラス会議と「ペアDEトーク」の併用が下位層児童に影響があったと示唆される。
では，以上の結果の要因についてクラス会議や「ペアDEトーク」での児童の様子を基に考察していく。

4．2　エピソード分析

4．2．1　クラス会議について

【10月４日　クラス会議　フィールドノーツより】
　ハッピーサンキューナイスにおいて，異性のことを見つけて言うようにチャレンジする子が増えてきた。
【10月25日　６年クラス会議　フィールドノーツより】
　男女交互の並び方になっていて，司会が「隣の人と相談してください」と声をかけると，嫌がらずに男女で相談できるところが多かった。
　解決策に対しての賛成・心配意見を女子３人が言っていた。

このように，日ごろから積極的に異性の良いところを見つけようとする姿や，男女関係なく自然と相談できる姿，積極的に発言する児童の姿が見られるようになった。さらに，下位層の児童には以下のような姿が見られた。

【11月１日　クラス会議　フィールドノーツより】
　全体の議題「イベントで男女仲良くするにはどうしたらいいか」について話し合った。司会のＡさんが上手く進められない時に「こうしたら良いんじゃない？」と声をかけたり，心配そうに見守ったりして,周りがフォローしている良い雰囲気があった。

クラス会議で司会を務めたＡ児は，人前で話すのが苦手な児童であった。しかし，Ａ児が司会となり，上手く進められない時に，周りがフォローしている様子があった。

【9月27日　クラス会議　フィールドノーツより】
　みんなの前で発言できるか，担任も心配していたＢさんは，９月はハッピーサンキューナイスを，紙に書いて用意し，異性の良さを見つけて発表していた。
【11月22日　クラス会議　フィールドノーツより】
　Ｂさんはハッピーサンキューナイスで，あらかじめ紙を用意せず，その場で考えて発表していた。

Ｂ児は，クラス会議が始まった当初，前もって用意してきた考えを紙に書いて発言することはできたが，その場で考え発言することが苦手な様子だった。しかし，「ペアDEトーク」とクラス会議を併用して行った後，クラス会議において，その場で考えて発言していたことから，「ペアDEトーク」とクラス会議を併用したことが，Ｂ児の発言行動に何らかの影響を与えたと考えられる。

また，クラス会議を行ったことで学級や自分がどう変わったと感じているか，自由記述アンケートをとった。以下は，その記述内容である。

【クラス会議実施前後の学級や自分の変化について：自由記述アンケートより】
・ハッピーサンキューナイスをする前は，感謝の気持ちを伝える機会があまりなく言うことができなかった。
　→ハッピーサンキューナイスの発表をすることで普段言うことの出来ない感謝の気持ちを伝えられるようになりました。
・私は，クラス会議をやる前は話合いであまり意見を言うことができませんでした。
　→クラス会議をやってみると，皆が意見を言えるように順番がまわってくるので，私も意見を言えるようになりました。
・クラス会議をやる前は，イベントで結構ケンカになったり，女子がドッジボールで楽しくないからケンカになったりしていた。男女ペアになるのが嫌だった。
　→クラス会議をやってから，男女同士，気をつかい合ってイベントでもケンカが無くなった。男女ペアになっても，ふつうにしゃべれるようになった。

アンケートより，クラス会議を実施してから，自分の気持ちや考えを発表することができ，男女の仲が良くなったと実感している児童が半数以上いることが分かり，クラス会議が児童の発言行動や異性の人間関係に影響があったと読みとれる。

これらのエピソードから，クラス会議と「ペアDEトーク」を併用したことで，実態調査期にあったコミュニケーション上の課題の克服に影響したと考えられる。では，コミュニケーション上の課題を克服するために導入した「ペアDEトーク」での児童の様子を見ることにする。

4. 2. 2　「ペアDEトーク」について

「ペアDEトーク」は，毎日朝の会や授業の導入で，毎日欠かさず実施していた。２分間話し続け，会話が途切れたら席に座るルールであった。初回では，半数の児童が１分半話し続けていたが，１週間後には，全員の児童が２分間話し続けていた。以下は，「ペアDEトーク」の会話内容である。

【10月31日　テーマ：犬派？猫派？】
Ｃ：「どっちも好きだけど，アレルギーがあるから・・・。」
Ｄ：「へ～。家猫と外猫，どっちがいい？」
Ｃ：「う～ん。大きさによる。」
Ｄ：「猫はひっかくよねー。」
Ｃ：「そうだね。犬は人間になつくよね。」
Ｄ：「あ～。」

この会話では，Ｄ児があいづちや質問を投げかけている。この二人は男女のペアで，２分間ずっと話しており，終始笑顔で，２分間が終わっていても話し続けていた。どのペアも，積極的にオープンクエスチョンを使ったり，ジェスチャーを踏まえて話していたりと，笑顔で楽しそうに会話をしていた。

「ペアDEトーク」実施前後の自分の変容について，アンケートを実施した。以下は，その記述内容である。

【「ペアDEトーク」実施前後の自分について：自由記述アンケートより】
・女子とはあまりしゃべらなくて，男子とも仲があまりよくない人がいた。
　→女子とも話せるようになり，仲があまりよくない人とはよくなり，もとからよかった人とは，もっとよくなった。
・自分から積極的に話すことができなかった。(特に，男子と話せなかった。)
　→男女関わらず積極的に話せるようになった。質問すると絶対，何か返ってくるから質問をたくさんするようになった。
・一部の人としか楽しく話すことができなくて，その人が何が好きか楽しいなどを知らなかった。
　→みんなと話せるようになったし，みんなの良さや良いところなどを知った。

記述内容から，男女関係なく自然と話し合えるようになれた実感や，相手と会話を長く続けられるようになった成長，相手の新たな一面を知ることが出来たなど，「ペアDEトーク」が相手と関係を築くきっかけになったことが読み取れる。また，「ペアDEトーク」実施後の感想には，以下のような記述があった。

【「ペアDEトーク」感想記述より】
・ペアDEトークを始めたら，女子とも気軽に話せるようになったし，相手の話を聞いて面白いことなどがあり，会話が楽しくなった。
・ペアDEトークをやって今まであまり話せなかった人もいたけれど，その話題や話が盛り上がると楽しくて，２分があっという間に感じてきてもっと話したいなと思いました。
・みんな話をちゃんと聞いているというのが伝わってきてとても嬉しかった。みんな30秒間でお題の答えを考えてすぐに言っていたし，２分間が結構すぐ終わる。みんなの良いところを知ることができてとても楽しい。

「ペアDEトーク」を楽しいと感じている児童が半数以上おり，特に「相手の話がおもしろかった」や「盛り上がった」という記述が多く，これまで接してこなかった相手と話す場を設けたことが，人間関係の幅の広がりにつながったと考えられる。

また，下位層児童は，「ペアDEトーク」で以下のような実感を得ている。

【「ペアDEトーク」実施前後の自分について：自由記述アンケートより】
・話をしている時は，話が短かったりして，１分も持たずに話が終わってしまうことが多かった。
　→ペアDEトークは，２分間であるお題について，ふだん自分が喋らないことを話したり，２分間がすぐに終わってしまったりすると感じることが多くなった。
・ペアDEトークをやる前は授業などで当てられても上手く答えられなかった。
　→今は，当てられたら少し上手く答えられるようになった。
【「ペアDEトーク」感想記述より】
・男子はもちろん，女子にもちゃんと２分間話せて，ペアDEトークを通して，アドリブ力，会話力が増した。会話でもジェスチャーを入れたりすれば楽しくなったり，より分かりやすくなることも分かりました。
・みんなが好きなこと，好きなものを全然知らなかったけれど，ペアDEトークをして，皆の好きなこと，好きなものを知られたので良かったです。ずっとやって，皆が好きなことをもっと知りたいと思いました。

以上の記述から下位層児童も，２分間話すことができるようになり，会話をつなげることや異性と楽しく話せた実感があることが読み取れる。

5　全体考察

本研究では，クラス会議とその導入期における「ペアDEトーク」を併用して実施した状況下で，Q-Uの学級全体の「被侵害得点」の下降，及び「承認得点」下位層児童の「承認得点」の上昇が確認された。観察や自由記述アンケートなどから「ペアDEトーク」の実施をきかっけにして，児童がコミュニケーションをすることに対して積極的になったことやコミュニケーションをする機会や相手の量的増加がうかがわれた。それによって話し合いが円滑に進むことでクラス会議が機能するなどのことが起こり，クラス全体としての侵害傾向が減少し，コミュニーション量の少なかった児童の承認感が高まったことに寄与したと考えられる。よって，「ペアDEトーク」は，クラス会議の課題

克服の手立てとして有効な手立ての一つと言っていいだろう。

6　今後の課題

本研究の結果は，単一事例において示されたことであり，今後，対象を広げるなどして効果の汎用性を検討する必要がある。また，本研究で見られた児童の変容における，クラス会議と「ペアDEトーク」の効果の範囲，また，双方の手立ての関係性については十分に言及できなかった。そして，児童の変容におけるこれらの手法外の要因の影響も考慮されるべきであり，検討しなくてはならない。さらに，コミュニケーションの量については増加が見られたと考えられるが，コミュニケーションの質的な変容にまで検討が及んでいない。今後は，こうした点についても更なる検討が必要である。

引用文献

(1) 文部科学省・中央教育審議会：「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(答申)」，2016
(2) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説特別活動編」，2017
(3) 前掲(2)
(4) 明石要一：「学級会の一考察－“発言力の重み”感覚を手がかりにして－」，千葉大学教育学部研究紀要，第1部，第27巻，41-53，1978
(5) 前掲(4)
(6) 松岡敬興：「特別活動における望ましい『学級活動』のあり方に関する研究－ドイツヘッセン州における『Klassenrat(学級会)』の取組に学ぶ－」，桃山学院大学研究所紀要，第3号，39巻，127-140，2014
(7) 前掲(6)
(8) 畑山浩樹朗：「低学年における話し合い活動を機能させる支援について－『各期に見合う話し合いの場の設定』と『週末助言の蓄積』によって営む学級会－」，上越教育大学学校教育実践センター教育実践研究，第18集，169-174，2008
(9) 井木みつる：「望ましい集団活動を通して，豊かな人間関係を築く特別活動：よりよい生活や人間関係を築くため，本音で話し合い，本気で実践する児童の育成」，京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報，第4巻，161-164，2015
(10) 前掲(9)
(11) 赤坂真二：『赤坂版「クラス会議」完全マニュアル　人とつながって生きる子どもを育てる』，ほんの森出版，2014
(12) 北野稔：「特別活動　対人関係の向上を目指した取組としてのクラス会議の可能性」，上越教育大学学校教育実践センター教育実践研究，第25集，181-186，2015,
(13) 前掲(12)
(14) 前回(11)
(15) 向後千春，堂坂更夜香，青木多寿子，赤坂真二，古庄高：「アドラー心理学とクラス会議で子どもの市民性を育てる(自主企画シンポジウム)」，日本教育心理学会総会発表論文集，第56集，144-145，2014
(16) 赤坂真二：『いま「クラス会議」がすごい！』，学陽書房，2014
(17) 赤坂真二：『先生のためのアドラー心理学　勇気づけの学級づくり』，ほんの森出版，2010
(18) 前掲(17)
(19) 曽山和彦・武内早奈美：「ショート・プログラムによる継続的なソーシャルスキル・トレーニングが学級適応に及ぼす効果」，名城大学教職センター紀要，第9巻，27-34，2012
(20) 高橋浩二・犬塚文雄：「朝の会・帰りの会で連続実施したSGEプログラムが自己受容に及ぼす影響に関する一研究」，横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要，第1号，81-96，2001
(21) 赤坂真二：『クラスを最高の雰囲気にする！目的別朝の会・帰りの会アクティビティ50』，明治図書，2016
(22) 前掲(21)
(23) 前掲(14)
(24) 前掲(14)
(25) 前掲(14)
(26) 前掲(21)
(27) ちょんせいこ：『ちょんせいこのホワイトボードミーティング：クラスが落ち着く!!低学年にも効果抜群』，小学館，2015
(28) 前掲(17)
(29) 河村茂雄：「学級づくりのためのQ-U入門『楽しい学校生活を送るためのアンケート』活用ガイド」，図書文化社，2006
(30) 前掲(29)
(31) 中野博幸・田中敏：『フリーソフトJS-STARでかんたん統計データ分析』，株式会社技術評論社，2014

Study on the handling of the problem at the class conference introduction period
−Focusing on "pair DE talk"−

Motoko KICHINAI* ・Shinji AKASAKA**

ABSTRACT

In this research, paying attention to "pair DE talk" as a means to overcome problems at the introduction time of the class conference, to clarify the effectiveness of "pair DE talk" in order to secure the "quantity and quality of communication" between children It was aimed at doing. At the introduction stage of the class conference, immobilized human relations and passive discussion were cited as issues. "Pair DE talk" was carried out on a daily basis continuously in the morning meetings and introduction of classes. As a result of using "class conference" and "pair DE talk" together, it led to the establishment of a wide range of human relationships among children, and it continued "Pair DE talk" everyday, which led to an improvement in children's communication skills It was suggested.

* Kakami Elementary School ** School Education